

【 会員投稿 】

読書の愉しみ (1)

鳥取市 高橋正晨

『若き日にバラを摘め・瀬戸内寂聴』（『読書のすすめ』岩波文庫編集部編）の中に、「生きている人間の愉しみは、食べることと、セックスすることと、読書することに尽きるのではないでしょうか。食欲も性欲も過ぎると害を伴いますが、読書だけは読みすぎても害を蒙ることがありません。」というのがあります。歳を取ってきて、読書にのめり込むようになりました。元来怠け者で、三段論法的な「レポート」や「ハウツー物」は好きでしたが、帰納法的な「小説」はあまり好きではありませんでした。でも、「詩」や「ことば」には大変興味を持っておりました。最近、山や川や湖や海や桜や若葉や紅葉や朝日や夕日がやけに美しく見えるようになりました。やはり、歳を取ったことの証明なのでしょう。何時までも青春を忘れないようにと「詩集」を読んだり、人生とは何だったのかと「名言」を読んだり、老人についての「小説」を読んだりすることが多くなりました。自分の人生を振り返りながら、死の準備の勉強をしているのかも知れません。岩波文庫などで面白いと思ったものをご紹介します。

■ エリート(日本と日本人への10の質問)

塩野七生 『文芸春秋 2007年7月号』

日本に活力がないのは、高齢化のせいではなく、日本のエリートとされる人々の自覚と気概に関わりがあるように私には思えます。

日本の指導層にないものは何か、と考えたとき、それは「ノブレス・オブリージュ」の精神ではないかと思えます。一般の大衆には行動の自由があることでも、自分は他の人にはない犠牲を払ってでも背負わなければならないものがある、という覚悟。ローマのリーダーたちが好んだストア派の哲学が説いたのがこの考え方でした。では、バブルが崩壊した後、日本のエリートたちは、「体を張った」のでしょうか。彼らは何もせずに、ただ自信を失っただけではないのでしょうか。

■ ノブレス・オブリージュ(高貴なる者の義務)

ひろさちや 『どの宗教が役に立つか』

高貴なる者、社会的に身分の高い者は、それだけ大きな義務を背負っているという考え方である。日本の政治家どもは、みずからをノブレス・オブリージュと自覚していないから処置なしである。エリート(ノブレス)であってエリートの義務(ノブレス・オブリージュ)を自覚していない奴は、「下等な人間」である。逆に、「上等な人間」とは、エリートであって、しっかりとエリートの義務を自覚している者である。

庶民(ノン・エリート)は、「上等な人間」「下等な人間」とは無関係である。したがって、「上等な人間」になる必要があるのは、エリートだけである。庶民は「上等な人間」になろうとしなくてもよろしい。気楽でいられるんですよ、庶民は。日本全体のことを考えるのは、ノブレスの仕事である。庶民は我儘勝手な要求をしてはいられないのだ。それで日本が潰れないようにするのが、政治家の仕事なのだ。その仕事ができないのであれば、さっさと政治家をやめればよい。なにもノブレスの仕事を、庶民が手伝ってやる必要はない。それが、ノブレス・オブリージュの考え方である。

■ 偽装と隠蔽(ことば) 『ベーコン随想集』

覆い隠すことは一種の無力な政略または智慧にすぎない。真実を語り、それを実行する時を知るには、強い知力と強い心を必要とするからである。それゆえ、大いに隠蔽する人は、普通より弱い部類の政治家である。

■ 議事(ことば) 『ベーコン随想集』

急ぎすぎることは議事にとって最も危険なことの一つである。それは医者「消化不良」もしくは早食いと呼んでいるものに似ている。これは必ず体を酸っぱい液や病気の隠れた種で満たす。それゆえ敏速を計るには、審議の所要時間によらずに、議事の進捗によるがよい。議事において敏速をもたらすのは、要件に専念することであって、それを一度にどっさり取り上げるのではない。手ぎわのよい人と思われたいために、短い時間にすばやく片づけたり、議事が終わったようにわざわざ見せかけたりすることばかり気にかかる人々もいる。しかし、手ぎわよく片づけて時間を短縮するのと、切り棄てて短縮するのは別である。会議または会合を何回か重ねて切り棄てによって処理した議題は、不安定な状態で一向に埒があかないのが普通である。

■ 反乱と騒動(ことば) 『ベーコン随想集』

国民を治める者は、国家における嵐の前兆を心得ておかなければならない。この嵐は事態が平等に向かって推移する時、最もはげしい。それは自然界の嵐が春分と秋分の頃に最もはげしいのと同じである。また嵐の前にはどこからともなく吹きつける風や、ひそかにうねる大波があるように国家にもそういうものがある。

■ 書(ことば) 『易経』

子曰く、書は言を尽くさず、言は意を尽くさずと。

< 続く >



【 会員投稿 】

読書の愉しみ (2)

鳥取市 高橋正晨

■ 読書(ことば) 『ベーコン随想集』

反論し論破するために読むな。信じて丸呑みするためにも読むな。話題や論題を見つけるために読むな。しかし、熟考し熟慮するために読むがよい。ある書物はちょっと味わってみるべきであり、他の書物は呑み込むべきであり、少しばかりの書物がよく噛んで消化すべきものである。すなわち、ある書物はほんの一部だけ読むべきであり、他の書物は読むべきではあるが、念入りにしなくてよく、少しばかりの書物が隅々まで熱心に注意深く読むべきものである。読書は充実した人間を作り、会話は気がきく人間を、書くことは正確な人間を作る。

■ 堅いものは噛まねばならぬ(詩) 『ゲーテ詩集』

世界は粥で造られてはゐない。
君等は懶けてぐづぐづするな、
堅いものは噛まねばならない。
喉がつかまるか消化するか、二つに一つだ。

■ 教養(ことば) 森鷗外『山根大夫・高瀬舟』

教養とは読書によって得たすべてを忘れ去った後に残る何ものである。

■ 学問(ことば) 『ベーコン随想集』

学問は思考の楽しみと弁論の飾りと仕事を処理する能力のために役立つ。楽しみのためになる学問の主な効用は、私生活と隠退時にある。飾りのためになる主な効用は、会話にある。そうして能力のためになる主な効用は、仕事についての判断と処理にある。熟練した人は仕事を一つ一つ片づけ、おそらく細かい点について判断を下せるであろうが、全般にわたる勧告、業務の計画および整備は、学問のある人々から最も適切に出されるからである。

歴史は人々を賢明にし詩人の作品は才気煥發にし、数学は明敏にし自然哲学は考え深し、道徳は厳肅にし、論理学と修辞学は議論好きにする。学問は性格となる。

■ 財産(ことば) セネカ『幸福な生活について』

財産は、賢者にあつては奴隷の地位にあるが、愚者にあつては支配者の地位にある。

■ 人生(ことば) 『アミエルの日記』

人生は、段々に諦めて行くこと、絶えず我々の抱負、我々の希望、我々の所有、我々の力、我々の自由を減らして行くことの修業である。

■ 毎日(ことば) マルティアリス『エピグラム』

すべての日がそれぞれの贈り物をもっている。

■ 家(ことば) 徳富蘆花『自然と人生』

家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。誰か云ふ、狭くして且陋なりと。家陋なりと雖ども、膝を容る可く、庭狭きも碧空仰ぐ可く、歩して永遠を思ふに足る。

■ 建築(ことば) 『ベーコン随想集』

家が建てられるのは住むためであつて、眺めるためではない。それゆえ、決まりきった外観より実用を優先させるがよい。ひたすら美を目ざして家を立派に造ることは、費用をほとんどかけずに家を建てる詩人たちの魔法の宮殿に任せるがよい。立派な家を悪い敷地に建てる者は、牢獄に身を委ねるようなものである。

■ 庭園(ことば) 『ベーコン随想集』

全能の神は初めに庭園を造った。それは本当に人間の楽しみの中で最も純粋なものである。それは人間の精神にとって最大の気晴らしであり、これがなければ、建物も宮殿も粗雑な手仕事にすぎない。

■ 老年(ことば) キケロ『老年について』

平穩にして温和な老年は、静かに、清く、優雅に送られた生涯の賜物である。

■ 死(ことば) 『ベーコン随想集』

子供が暗闇の中を行くのを恐れるように、人々は死を恐れる。そして、子供のあの生まれながらの恐怖は物語を聞くにつれて大きくなるが、死の恐怖もおなじである。確かに、死を罪の報いやあの世への旅立ちと見なすことは、敬虔で信心深いことである。しかし、自然に対して当然支払うべき貢物である死を恐れるのは無気力である。

■ 安らかな死(ことば) 『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』

あたかもよくすごした一日が安らかな眠りを与えるように、よく用いられた一生は安らかな死を与える。

■ 文学(ことば) キケロ『詩人アルキアス弁護演説』

文学に楽しみだけを追求するとしても、精神のこの気晴らしをたいへん人間的で自由人に値することだと諸君は判断されるであろう。……文学は、青年の精神を研ぎ、老年を喜ばせ、順境を飾り、逆境には避難所と慰めを提供し、家庭にあつては娯楽となり、外にあつても荷物にならず、夜を過ごすにも、旅のおりも、バカンスにも伴となる。

■ 小説(ことば) H・G・ウェルズ

今日見るような社会の発展に伴って次々に起って来る問題の大部分を、お互いに論じあうことができる手段といつては、小説をおいてほかにはない。これからの小説は、社会に対する媒介者、理解の伝達者、自己反省の道具、道徳を展示し、風俗を交換する者、風習を作りだす者、法律と制度および社会のドグマと物の考え方を批判する者でなければならない。

■ 詩(ことば) 『萩原朔太郎詩集』「月に吠える」

詩は神秘でも象徴でも鬼でもない。詩はただ、病める魂の所有者と孤独者との寂しいなぐさめである。

■ 詩(ことば) 『宮沢賢治詩集』

詩は裸身にて理論の至り得ぬ堺を探り来る。そのこと決死のわざなり。

【 会員投稿 】

読書の愉しみ (3)

鳥取市 高橋正晨

■ 老年への変容(小説) 伊藤整『変容』

この二、三年、やがて六十歳だと思ようになってから、色ごとの適齢期は過ぎたのだ、と自分にいいかかせている。こちらから女を求めることはしないのだ。

不思議なことだが、こちらから求める気持ちを抱かぬことにきめてから、女の方で接近して来ることが多くなった。自分の欲望を支配できるような私の年齢の男が、女には頼もしく見えるのかも知れない。動かぬ猫のところへ鼠が不思議そうにうかがい寄るように、女たちは私のまわりに近づく。どう？ 私はそんなに魅力のない女でしょうか？と言うように。また、おや、まだ見たところ元気ね。ちょっと私と遊ぶ気にならない？ と言うように。私の臉はたれ下がつてきた。頬と手の平には老人斑の走りが、薄い赤いシミのように現れかけている。だが、その赤いシミのためか、私の顔色には赤味があり、私は何かにつけて若く見えると言われる。老人だから、思ったより若い、と言われるのである。が、肉体的にもひどく衰えたわけではない。精神的には自分で困るほど好色になっている。六十をすぎた老人たちが、よくはしたない色話をしているのを、私はみっともないと思って見ていた。今の私にはその衝動がよく分かる。私はちょうど、その好色な老人という領域に入りかけたところのようである。老齡の好色と言われているものこそ、残った命への抑圧の排除の願いであり、また命への讃歌である。無関係な人には醜悪に見えるはずの、その老齡の好色が、神聖な生命の輝きをもって私の前方にまたたき、私を呼んだのだ。

■ 利根川のほとり(詩) 『萩原朔太郎詩集』

きのふまた身を投げんと思ひて
利根川のほとりをさまよひしが
水の流れはやくして
わがなげきせきとむるすべもなければ
おめおめと生きながらへて
今日もまた河原に來り石投げてあそびくらしつ。
きのふけふ
ある甲斐もなきわが身をばかきくばかきいとしとおもふうれしさ
たれかは殺すとすものぞ
抱きしめて抱きしめてこそ泣くべかりけれ。

■ 青春(詩) ホイトマン詩集『草の葉』

「青春」、大きくて、元気がよくて、愛に溢れて優美さと、力強さと、魅力に横溢する青春よ君は知っているか、ひよっとしたら「老年」というやつが君たちに劣らぬ優美さと力強さと魅力をそなえて君のあとからやってくるのを。

■ 一日再び晨なり難し(詩) 『陶淵明全集』

盛年重ねて來らず、
一日再び晨なり難し
時に及んで当に勉励すべし、
歲月は人を待たず。

■ 歌(ことば) 『古今和歌集』

力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあわれと思はせ、男女のなかをもやはらげ、猛き武士の心をもなぐさむるは、歌なり。

■ 歌(ことば) 南原繁『歌集形相』

優れた歌人の歌一首がよく一卷の哲学書や一編の小説にも勝る深い感動を以て人に迫ることあるは、私のしばしば経験したところである。

■ 英雄豪傑、名匠大家(ことば)

森鷗外『うたかたの記』

英雄豪傑、名匠大家となるには、多少の狂気なくて愜はぬことはセネカが論をもシェイクスピアが言をも待たず。

■ 人生の浪費(ことば) セネカ『人生の短さについて』

われわれは短い時間をもっているのではなく、実はその多くを浪費しているのである。人生は十分に長く、その全体が有効に費されるならば、最も偉大なことをも完成できるほど豊富に与えられている。

■ 女神ヴィーナスの庭園(詩)

シェイクスピア詩集『ヴィーナスとアドニース』

「かわいいお前」と女神は言う。「ほら、閉じ込めたわ、この象牙の囲いの内側に。私は庭園になるから、お前はそこに棲む鹿におなり、好きなところで餌を探していいよ、上の丘でも下の谷間でも。唇のところで草を食んだらいい、上の丘が乾いていれば、もっと下のほうに降りて、快い泉の所までさまよいなさい。」

「この囲いの中にはおいしいものがたっぷりあるわ、谷底に生える甘い草、気持ちのよい高原、丸く盛り上がった丘、暗く茂るやぶ、そこは嵐からも雨からもお前を守ってくれる、私はそのような庭園なのだから、私の愛しい鹿になって。獵犬に追い立てさせたりしないわ、たとえ千匹もの犬が吠えたとしても。」

■ 身のまわりのこと(ことば)

『島崎藤村随筆集』『身のまわりのこと』

ずっと年をとってからの日のために、雪が降ったからお茶でも飲みにお出下さいと言えるような、そういう老後の友達を三、四人つくって置きたい、男でも女でもいいからそういう友達を三、四人ほしい、それにはお婆さんに成ってしまってからでは遅い、今からそれを心掛けて置きたい。

< 了 >

